反歴史思想としてのポスト・モダニズムとマルクス主義
―「歴史的他者認識の学」としての歴史学をめぐって ―

慶應義塾大学名誉教授　神田 順司

報告要旨

学問としての歴史学は 18 世紀末から 19 世紀初頭のヨーロッパにおいて成立した。もちろん歴史叙述は古来より戦記などの記録として世界各地に存在していた。そうした出来事の記録としての歴史が、キリスト教文化のもとで神学や法学の補助学として、すなわち教義を伝えるための物語や逸話として、あるいは法の権原を示す具体例の叙述として位置づけられることになる。しかしその後の世俗権力の抬頭を背景に、歴史は王朝史や教訓史として描かれ、さらに新大陸の発見や啓蒙主義の影響のもと、世界史の哲学や文化の歴史などが記されるようになる。そのような様々な歴史叙述が混在するなか、ドイツ文化圏のアカデミーを中心に歴史的事実の叙述を強調する歴史学が登場する。それを定式化したのがランケである。しかしながら、歴史をもっぱら事実の叙述とするランケの発想は、決して理論的に基礎づけられたものではなく、歴史自体を神の業と看做す彼の神学的世界観を背景に、それを忠実に描くとする単純素朴な反映論ないし模写説の発想であった。だがランケの描いた実際の歴史とは、主観を排し非党派性に徹すると自称する主張とは裏腹に、極めて保守的な国家主義の視点からの叙述にすぎなかった。しかし 19 世紀後半の工業化の流れに伴って自然科学が発展すると、その方法に倣って歴史学の課題を社会の発展法則の探究に求める発想が登場する。それに対して歴史学とはむしろ出来事の個性や意味を追究する学問であると主張したのがヴィンデルバントやリッケルトなどの新カント派であった。それは歴史学の基本をむしろ歴史に対する意味付けや解釈に見る歴史の構成論の登場を意味した。この構成主義の発想がのちにクローチェやコリングウッドをはじめヘイデン・ホワイトなどの見解に繋がってゆく。そうした主観の構成機能を「恣意性の言語学」に依拠してさらに極端なまでに肥大化させたのが、ポスト・モダニズムである。それによれば、そもそも実体としての歴史などは存在せず、歴史と称されるものとはもっぱら主観の読みと記述の連鎖であって、客観的な事実などあり得ないというわけである。こうした破滅的な「歴史ニヒリズム」の蔓延を前に、事実認識を連呼するだけの歴史学はもはや立ち行かず、唯々「立ちすくむ」状況に陥っている。いまや実証研究を旨とする歴史学には、実証研究の根本に立ち返り、それを支える堅固な認識論の構築が求められている。

このような課題に向けて本報告では、近代以降の歴史学において認識論の両極をなす上記の二つの認識モデルの問題性を、すなわち歴史を過去の事象の模写ないし反映と見る客観主義的モデルと、歴史を歴史家による構成と看做す主観主義的モデルのそれぞれが持つ問題性を、その影響なども含め批判的に論じてゆく。なかでも現代の「歴史ニヒリズム」のような極端な主観主義との対決を通して顕在化してきた理論的主題、すなわち歴史認識における「他者性」や史料の持つ「拘束性」の問題を、言語哲学的アプローチを軸に主観主義の歴史的背景などを踏まえながら明らかにする。

新カント派によって提起された歴史の構成主義は、その後とりわけコリングウッドの主観主義やホワイトの「物語論」を通してさらに展開される。そうした主観主義の拡がりを前に歴史学が十全な認識論の基礎を形成し得ない状況のもと、1970 年代に入ると「歴史ニヒリズム」ともいうべき徹底した不可知論が登場する。ポスト・モダニズムの抬頭である。ポスト・モダニズムとは、基本的にヨーロッパ形而上学由来の概念的思考様式の解体をめざす様々な論者によって編み出された流行思想の総称である。それらは、バルトやリオタールからフーコ、デリダに至るまで、それぞれの思想的系譜や関心は異なるものの、歴史認識においては徹底したニヒリズムに帰着する点で共通している。その源泉は、「記号の恣意性[l'arbitraire du signe]」を基礎とする言語観にある。彼らにとって、それぞれの言語観がソシュールに由来するものであろうと、あるいはその系譜にあるコペンハーゲン学派に、さらにはヴィトゲンシュタインに依拠するものであろうと、とにかく言語とは指示対象を持たないたんなる記号にすぎない。したがって言語記号によって記されたテクストとは、それが歴史のテクストであれ文学のそれであれ、その外部に一切の指示対象を持たないという。むしろ、彼らにとって「外部世界」と言われているもの自体が、基点を欠いた言語記号の集合体に他ならず、しかもそのような言語記号によって記されるテクストは、それが誰によって記されたものであろうと、それ固有の意

味を持たず、したがって著者性もなく、それぞれのテクストの意味を決めるのはもっぱらひとりひとりの読者だというわけである。それゆえ歴史学においても、妥当性のある歴史像などは存在せず、あるのはただひとりひとりの多様な「読み」であり、それらが紡ぎ出す無数の「物語」だということになる。このような「歴史ニヒリズム」が、戦争犯罪や大量虐殺などの過去の重大な出来事に対する歴史的解明を阻害する機能を果たすことは、実際の裁判の事例や保守的世論の動向を見れば、明らかである。

他方、この極端な構成主義に対して、あたかもその対極にあるかのような外見を繕いながら、実際には同じく反歴史性を特徴とする思想にドグマとしての反映論ないし客観主義がある。そのうちもっとも理論的に整備されたかのように自称する思想としてマルクス主義を挙げることができる。しかしそれは、ランケや伝来の歴史主義のような「事実認識」を唱えるだけの単純な反映論とは違い、「イデオロギー論」などの詭弁を張り巡らせた反歴史的なドグマティズムであった。「科学」を自称するこの独断的な思想は、むしろその創始者マルクスに由来する革命的メシアニズムに貫かれていた。のちにボリシヴィキ暴力支配の貫徹とその後の国際共産主義運動の拡大のなかで世界史的「天才」にまで祭り上げられたマルクスは、大学時代には怠惰と放蕩の毎日を過ごし、自身の在学期限も忘れ、すでにベルリン大学法学部を除籍退学となった事実さえ知らなかった。それにより学位論文提出資格をも失った彼は、当時、手書きの論文と審査料さえ送付すれば簡単に取得できるイェーナ大学哲学部の博士学位を、しかもアカデミーでは通用しない下位の学位を、事実上、審査をすり抜けて取得したにすぎない。その後ボン大学での教授資格獲得を目指して画策するも、やはりことごとく失敗。やむなく彼は当時台頭しつつあったジャーナリズムの道に進むものの、政府との軋轢のなか、わずか５か月で失職。結局、彼はパリに移住したのちヨーロッパ各地を転々とすることになる。当時すでに「共産主義同盟」のメムバーのひとりであったマルクスは、1848 年革命の勃発を機に一時期ケルンに戻り『新ライン新聞』の刊行に参加。しかし革命の無残な敗北に直面した彼は、最終的にはロンドンにて亡命の日々を送り、エンゲルスの資金に寄生しながら経済学研究に向かうことになる。

その経済学研究には、それまで彼が観念的に構成してきた「プロレタリア革命」の理論や論敵の思想を「幻想」として貶めるための「イデオロギー論」などの一連の虚構や詭弁の数々が集約されたかたちで表現されていた。なかでもマルクスが『経済学批判』を記すにあたり、その方法を模索した「経済学批判要綱」の序説には、かつて彼が「実践ぬきに対象認識などあり得ない」などと豪語したにもかかわらず、結局のところ、行き着く羽目になった理論としての「認識論」についての、むしろ矛盾に満ちた考察が記されていた。その序説においてマルクスは明らかに構成主義の視点から議論を始めている。彼は特定の国や地域を考察する場合、その国や地域の生産を支える全住民を観察したところで、たんなるカオス以上のものには到達し得ないという。むしろひとは諸個人や住民というカオスの全体を分析的に考察することによって、たとえば労働や分業、階級や資本などの最も単純な抽象概念ないしはカテゴリーを獲得するところまで進んでゆく。そのようなカテゴリーを前提にふたたび諸個人や住民へと戻った時、対象はもはや漠たる全体ではなく、「多くの規定や諸関係からなる豊かな総体」として、すなわち具体的なものとして登場するというのである。つまりこの抽象化と具体化という二重の道を通って行われる対象認識において、具体的なものはむしろ抽象概念の具体化の過程において、またその成果として登場するというわけである。しかし、このような対象認識に関する見解は何もマルクス独自のものではない。彼はむしろ基本的にはヘーゲルが『精神の現象学』で展開した「概念把握［Begreifen］」の発想を踏襲している。しかしマルクスによれば、ヘーゲルは学問が歩むこの二重の道筋のうちの後者すなわち具体化の道筋を取り違えているという。具体的なものは、思考の中では出発点としてではなく、成果として登場しはするが、それは同時に「現実の出発点であり、直感やイメージという出発点」をなしているという。その意味でヘーゲルは、具体的なものとして獲得された「現実的なもの」を、思考の成果と思い違える「幻想」に陥っているというのである。もちろんこの論難はヘーゲルに対するマルクスの青年期以来の無理解を示している。しかしいずれにしても、構成主義の立場から論じられた対象認識についてのマルクスの議論は、ここでヘーゲル批判の論点を、すなわち認識から独立して存在する「具体的なものそれ自体」を無媒介に前面に押し出すことによって、唐突に実在論へと回帰する。だが、対象を思考の中で「具体的なもの」として再生産する道筋の外部に存在する「具体的なものそれ自体の成立過程」とは何か。言い換えれば、ひとは「具体的なものそれ自体」を、認識活動以前にどのようにして知り得るのか。これらについてマルクスは何らの論証も叙述も行っていない。彼は一方で対象が抽象概念ないしカテゴリー

を通してはじめて「具体的に」把握されるという構成主義の立場に立ちながら、他方で世界史を「普遍的精神」の自己展開として描くヘーゲルに対しては「直感やイメージ」を、認識の外部に存在する「具体的なものそれ自体の成立過程」として唐突かつ独断的に対置する。それによって彼は、ヘーゲルが理論的に描き出した歴史の発展過程を、たんなる主観の構成物のひとつに貶め相対化しようと企てる。マルクスがヘーゲル左派思想に対する悪罵として導入した「イデオロギー論」は、結局のところ実在論的ドグマそのものを支える「詭弁」としての本性を現すことになる。

したがって、このヘーゲル「批判」に続いてマルクスが、対象把握を可能にする抽象概念の形成と、彼が執着する「具体的なものそれ自体」との関係に論を転ずるのはけっして偶然ではなかった。マルクスはその立論の中に構成主義と実在論という矛盾する二つの原理を混在させている限り、対象認識において彼自身が展開した構成主義と、同じく彼がヘーゲルに対置した「具体的なものそれ自体」という実在論のドグマとを整合的に結びつける必要に迫られことになった。マルクスの立論は、たとえそれが経済学の根本カテゴリーの析出をめざすものであろうと、彼の構成主義を支える抽象概念の基礎づけを主題とする限り、こうした認識論上の問題に突き当たらざるを得ない。そのような抽象概念を実在論と結びつける理論装置として彼が持ち出したのが、他ならぬ「イデオロギー論」であった。彼によれば特定の社会には特定の抽象概念が「イデオロギー」として形成されている。それらを歴史的に整理し選択し得るのは世界史の頂点に立つ認識主体だけである。したがって特定の客観的実在と概念とは歴史的に何らの齟齬もなく把握できるというわけである。マルクスのこの傲慢な発想には、より発達した時代や社会の概念は未発達の時代や社会の概念を包摂し得るという露骨なまでの近代主義があった。「イデオロギー論」によって最大の恣意性を保証された彼の対象認識にとって、歴史の反駁などあるはずもなかった。大学時代を通して怠惰と放蕩の日々を過ごし、まともな学問的指導も訓練も受けたことのないマルクスは、ベルリン大学を除籍となり、肝腎の論文提出資格さえ失っていた。やむなく当時「楽勝」で知られたイェーナ大学哲学部に我流で書いた未完の論文を提出し、悪運の強さからか、公式な審査さえもすり抜けて学位の取得に成功する。しかし、それは形ばかりの「下位の学位」にすぎなかった。こうして辛うじて学問の世界をすり抜けてきたマルクスは、したがって考察対象[Sache]に即すという学問的矜持など持ち合わせてはいなかった。

歴史ニヒリズムと同じく、こうしたドグマによる歴史の独占は、われわれ歴史家が批判に耐えうる歴史像を形成するうえで基本的に陥ってはならない傲慢さである。マルクス主義のドグマのみならずポスト・モダニズムの歴史ニヒリズムという反歴史的思想の両極を経験したわれわれ歴史家はどこに向かえばよいのか。

しかし打開の道がないわけではない。ポスト・モダニズムが既存のアカデミズムの破壊を狙って肥大化させた「記号の恣意性」の問題は、それがソフィスト以来の詭弁であったがゆえに、のちに強力な対抗思想を形成せしめることになった。「非恣意性の言語学」である。それは、「記号の指示性」を否定することによって外部世界と絶縁する言語学とは反対に、言語をその生成の原点において対象世界と結び付いた「全人的な」活動と看做す言語学である。その系譜のなかでも、とりわけ歴史の言語と対決するに相応しいフムボルトの言語哲学を基礎に、歴史の「他者性」や史料の「拘束性」の問題を言語レヴェルで追究することはできる。そしてこの言語哲学を基礎とする認識論の議論を、フムボルト言語哲学の系譜上にあるドイツ古典文献学やドロイゼンの『歴史論』などの歴史理論研究を踏まえて展開し、「歴史的他者認識」をめざす歴史学に相応しいかたちで発展させることは可能である。古典的言語学を源泉とするこうした歴史認識論の探究は、世界を「言語の檻」の中に閉じ込めることによって外部世界の認識可能性をはじめから遮断するソシュール言語学や、それに類する言語思想はもとより、究極的にはこれらの構造主義言語学の「権威」にすがるポスト・モダニズムが「記号の恣意性」をさらに肥大化させることによって編み出した「歴史ニヒリズム」を根底から批判する試みに繋がっている。それはまた文化や思想のみならずその根本をなす言語活動をも「イデオロギー」のもとに抑え込んで矮小化する偏狭かつ傲慢な唯物論的反歴史思想を克服する可能性をも孕んでいる。けだし、それは他ならぬ「歴史的他者認識の学」としての歴史学を回復するための、比喩でもドグマでもなく、言語哲学に依拠した認識論的考察を通して回復する試みだからである。その試みは同時に、フムボルトの言語思想に精通した現代ドイツのロマン語学者ユルゲン・トラーバントが歴史の「言語論的転回」に対して提唱する「言語学の歴史的転回」にも繋がる理論的な営みとなる。